

講演①

古代山城の真実

「鞠智城はなんのために
つくられたのか」

講演者紹介

井上 和人（いのうえ かずと）

東京外国語大学卒業。東京大学文学部考古学科卒業。奈良国立文化財研究所研究員、文化庁文化財調査官、奈良文化財研究所副所長を経て、現在、明治大学大学院文学研究科特任教授。東洋文庫客員研究員。奈良文化財研究所名誉研究員。文学博士。専門は古代考古学。

講演① 「古代山城の真実―鞠智城はなんのためにつくられたのか―」

明治大学大学院文学研究科特任教授 井上和人

井上和人と申します。私は今紹介にありましたように、明治大学で教員を務めております。また、同じく主催者であります明治大学日本古代学研究所のメンバーでもございます。今日は大勢の方に来ていただいて、本当にありがとうございます。同時にこのような機会を与えていただいたことに対して、深く心から感謝したいと思います。また、こんなに大勢の方々の前で話すのは非常に光栄なのですが、かなり緊張しております。

本日のテーマは「鞠智城の終焉」ですが、私は、あえてもう一度問い直してみたいと思うのです。なぜ鞠智城は造られたのか。何のために、何を目的として造られたのか。もちろん、今まで鞠智城に限らず、古代山城についての研究には膨大な蓄積があります。鞠智城の性格・役割についても、いろいろな議論が積み重ねられていることは言うまでもありません。けれども、私、実は今までとは違う理解に到達してしまったのです。これは困ったと思うのですが、皆さんにうまくお伝えできれば幸いです。



一. はじめに

年表、歴史（資料編18頁）については、先ほど、西住さんの話にもありましたので詳しくは述べません。

ただ、一つ重要なことは、六六〇年に唐と新羅の連合軍によって百済が滅ぼされます。日本は、それ以前から数百年の間、長く百済と同盟関係を結んでいました。これは高句麗や新羅による脅威に対する軍事同盟ですが、百済をもう一度復興させなければ、日本列島が危ないということで、援軍を派遣することになりました。時の天皇、斉明女帝自ら大軍を率いて九州の朝倉宮に行きます。

ところが、ここで斉明女帝が崩御するのです。百済支援はいったん、頓挫します。後を継ぐのが、その長男であった中大兄皇子です。彼は六六一年、斉明女帝が亡くなってから七年の間、本来天皇に即位すべきなのを、天皇にならずに日本の最高指揮を執ります。七年間の天皇不在という、異常事態が続いた時代でもあったのです。

山城についていえば、『日本書紀』に最初に出てくるのが六六五年のことです。筑紫国に大野と基肄の二つの城を造る。長門に築城ともありますが、この場所は分かっています。六六七年には大和国に高安城、讃岐に屋嶋城、対馬に金田城を築くとあります。その次は六七〇年のこと、先ほど出てきた高安城を修理する。また、長門と筑紫にお城を造るとあります。これについても、どこなのか特定されていません。山城の築造記事はこれがすべてです。六六五年の大野城から、この六七〇年の長門と筑紫までのわずか六年間に限られます。これは非常に重要なことだと思います。

その後、六九八年に鞠智城が登場してきます。藤原京の時代です。平城京に都が移るまだ一〇年ほど前ですが、この年に鞠智城を修理したとあります。ですから、鞠智城は既にこのとき存在していた。発掘調査の成果なども踏まえると、鞠智城も先ほどの六六五年から六七〇年の五年の間に造られたことはまず間違いないと判断すべきだと私は考えています。

二・古代山城の分布状況と類型

さて、古代山城といわれる遺跡は、西日本各地に現在二三箇所確認されています。今後若干増えるかもしれませんが。山の中にありますので、なかなか見つかりにくいということもあります。それから、戦国時代のお城などと重なっている場合があるので、古代の城というふうに理解されないケースもあるのですが、少なくとも二二の山城があります。

(一) 古代山城の三つの類型

このうちの一箇所を除く二一箇所は、明確に二つの類型に分けることができます。その特別な一箇所が鞠智城なのです。

二つの類型のうちの一つは、「山岳型山城」と私は呼ぼうと思います。高い山の山頂付近に城壁が巡ります。城壁の実態は土塁であり、あるいは石を積み上げた石塁ですが、ここでは城壁という言葉で統一します。もう一方の類型は「丘陵型山城」です。低い丘陵の上に、やはり城壁が巡るのですが、その城壁の一部が周辺の平

1. 古代山城 2つの類型

(1) 山岳型山城



香川県坂出市・丸亀市
讃岐城山(きやま)城

標高 476m
最低比高 270m



(2) 丘陵型山城



福岡県上毛町 唐原(とうばる)城

標高 203m
最低比高 100m



図18 古代の山城における2つの類型

1) 山岳型山城

香川県坂出市・丸亀市 讃岐城山(きやま)城



標高 476m
最低比高 270m



図19 讃岐城山城



讃岐城山(きやま)城

標高 462m
最低比高 270m

図20 讃岐城山城山頂付近

平坦地とほとんど同じレベルまで下がるという特徴があります。ですから、仮に敵が攻めて来た場合、防衛の機能という点では脆弱なのです。二二箇所のお山城は、この山岳型と丘陵型の二つに明確に分かれます(図18)。

これは山岳型山城の一つで、香川県の丸亀市と坂出市の市境にある讃岐城山城です。五〇〇メートル近い山の山頂付近に累々と城壁が巡っています(図19)。山頂に近い尾根あり谷ありの複雑な地形に城壁が巡っているのです(図20)。こういう高い山の上にあるのが山岳型の山城。一方これは、標高七〇メートルほどの低い丘陵の周りに城壁が巡っている丘陵型山城の一例です(図21)。豊前平野の唐原城という山城ですが、

このように明瞭に異なっている二つの類型に分かれる。当然のことながら、その機能、役割が全く違うということを示すと理解しなければならないでしょう。

この図は二三箇所の山城を真上から見たところと、横から見たところとです。小ささまざまあることがわかります(図22)。この中で、点線で囲んだものが丘陵型山城です。総じて小規模なものが多い。この城壁の周縁の長さが一番短い山城は唐原城で、一・六キロメートルほどです。それに対して山岳型山城には大

2) 丘陵型山城

福岡県上毛町 唐原(とうばる)城

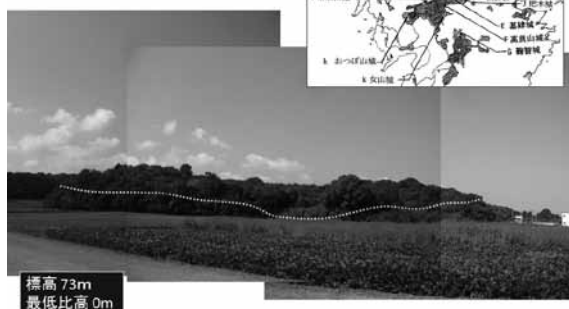


図21 唐原城

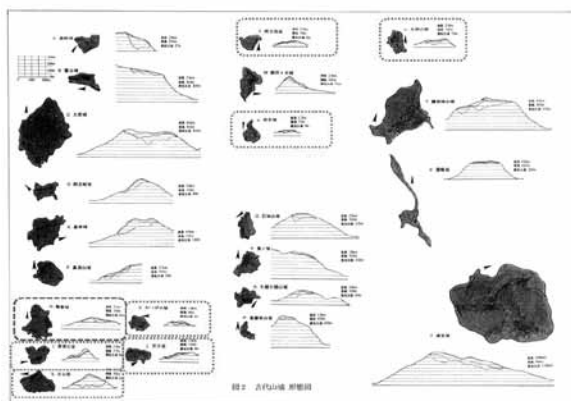


図22 古代山城形態図

規模なものが多く、最大の山城は高安城で、八キロメートルほどと推定されています。鞠智城はこれです。鞠智城の周囲は三・五キロメートルあり、比較的大型の部類になります。

もう少し事例を紹介しましょう。これは香川県高松市の屋嶋城です(図



図23 屋嶋城

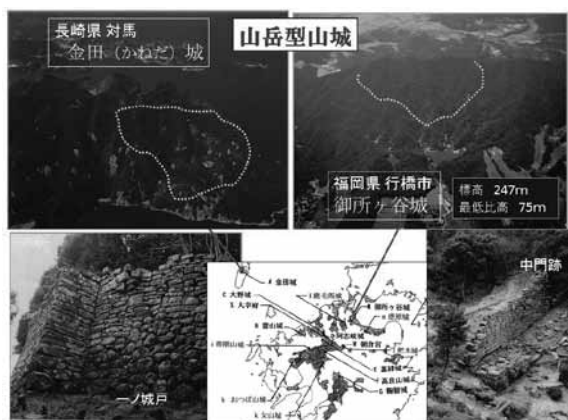


図24 金田城・御所ヶ谷城

23)。屋嶋といえますと、源平の合戦でも知られています。現在は半島ですが、かつては文字通り島でした。この屋嶋の山頂を巡って、延々と石塁が巡らされています(図23右下)。発掘調査が進められています。これは門の跡です(図23右上)。今日かなり整備されてもっと見やすくなっていますが、島の周囲は絶壁に近い。その島の山頂に山城が営まれていたのです。瀬戸内海に突出するような、立地条件です。

それからもう一例。これは対馬の金田城(図24左)。それから、これは福岡県、豊前平野の行橋市の御所

ヶ谷城(図24右)です。

注目すべきことに、金田城、御所ヶ谷城いずれも城壁の状況が酷似しています。従って、これは同じ技術の系統の下に造られたもので、しかも、時的にも非常に近接していると思われることができます。

一方、丘陵型山城の事



図25 女山城・おつぼ山城・帯隈山城



図26 唐原城

例ですが、これは福岡県のみやま市の女山(図25左上)です。「おんなやま」と書いて「そやま」と読みます。かつてはこの女山、卑弥呼女王にかかわる砦の跡ではないかとする説もありました。

城壁の一部が周辺の平地近くまで降りて来る、おつぼ山(図25右上)、帯隈山(おぶくまやま)(図25下)です。この丘陵型山城は、特に筑後平野の周縁部におつぼ山、帯隈山、女山、把木城と、集中しています。

山岳型山城と丘陵型山城には共通した地形的特徴があります。たとえば唐原城ですが、地形図で見ても分かるように、内部に平坦地がないのです(図26)。尾根があり、谷があり、ただそれだけなのです。山岳型山城もそうです。険しい斜面、谷が入り組んでいまして、平坦地がない。それらに対して、肥後の鞠智城だけは、内部に広い平坦地があります(図27)。西住さんに事前にお聞きしまし

第3の類型 鞠智城

城郭内に広大な平坦地がある。

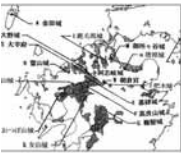


図27 鞠智城

たら、これはもともとの地形ほとんどそのままなんだそうです。それを利用して、つまり平坦地があるような場所を選んで鞠智城が造られている。ここだけなのです。他の二一箇所の、丘陵型にしる、山岳型にしる、城壁の内部は、ほとんどが険しい地形だけなのです。私は、内部に広い平坦地が確保されているという点こそ、鞠智城の非常に重要な意味があると思います。

(二) 古代山城の分布

鞠智城を入れて二二箇所の山城のうち、一四箇所は山岳型、それから、七箇所が丘陵型です。分布状況を見ますと、北部九州に集中しています（資料編20頁）。それから瀬戸内海の南北沿岸、一番東にあるのが高安城です。北部九州をもう少し細かく見ますと、福岡平野の近くと大宰府の周辺、筑後平野の周辺、それに福岡県の東北域に集中分布域があるという特徴があります。山陰にも、四国の南部にも、南九州にも、近畿地方以東にも全くありません。この西日本の限られた所にあるということも、際立った特徴といえることができるでしょう。

三、古代山城の築造年代

六六三年の白村江の敗戦の直後、六六四年に水城が造られます。それから、防人の制度が作られます。そして、六六五年に大野城、基肆城が造られます。その時期の日本の政治の中心、大和政権の中心地は飛鳥です。これも非常に重要な視点です。

山城が造られはじめて二年後に、都は飛鳥から近江の天津、琵琶湖の西岸に遷されます。翌六六八年の正月に、天津宮で中大兄皇子はようやく晴れて天皇に即位します。後に天智と呼ばれる天皇です。その後の歴史を見ますと、それから三年後、六七一年に天智天皇は天津宮で崩御します。その翌年に壬申の乱が起きて、大海人皇子方が勝ち、都を再び飛鳥に戻し、天武政権を樹立するという歴史が続きます。これも、これからの話に重要な意味を持ってきます。

(一) 斉明朝築造説の非

初めに、私は新たな理解に到達したと言いました。なぜかという、従来の固定観念、あるいは誤った常識というのが確実にあると思うのです。私はそれに気が付いてしまったのです。まず、第一の誤解として、山城の築造が白村江の戦いの後ではなく、前だという説が根強く主張されています。

斉明女帝が百済救援のために軍隊を率いて九州にやって来ます。彼女が大本營としたのが朝倉宮です(図28)、筑後平野の東北縁の朝倉宮に、斉明女帝は六六一年の五月九日に入ります。それから二カ月後に彼女はここで崩御するのです。唐突の死です。『日本書紀』には詳しい理由が書かれておりません。あまりこの



この説は従来からありますが、私もそれに賛同します。

研究者の中には、この朝倉宮を巡るように、丘陵型山城や山岳型山城が、あたかも朝倉宮を守るようにして造られているので、この一帯の古代山城は、斉明女帝のときに造られたのだというふうに主張されています。しかし、わずか二カ月で、ここで亡くなってしまうのです。それ以後、朝倉宮が歴史の舞台に登場する

ことはありません。ですから、朝倉宮防衛のための山城築造説は現実性に乏しいと思います。これは朝倉宮の推定地の一つです（図29）。筑後川が近くを流れています。筑後平野の東北辺に当たります。地形的に見ますと、周りを丘陵で囲まれており、前面を川で閉ざされている。これは地形的に王宮を守るのに適した場所と言えます。

私は数年前に初めてこの朝倉市の志波地区に行きまして、これは大和の飛鳥だと思いました。奈良の飛鳥も狭隘な場所にあるのです。飛鳥の王宮、飛鳥の都は、唐の軍事的な脅威に備えて、盆地の奥に避難させたというのが、飛鳥の真実だと私は判断しています。

転しているわけです。私は八木先生の説が正しいと思います。時間がありませんのでお話しできませんが、『日本書紀』のその記事は、決して斉明朝に古代山城が造られたということを物語るものではないと、私は理解しています。

(二) 天武朝以降までの築造継続説

もう一つ、大きな見解の違いがあります。先ほど天智天皇が六六八年に即位したと言いました。六七一年、

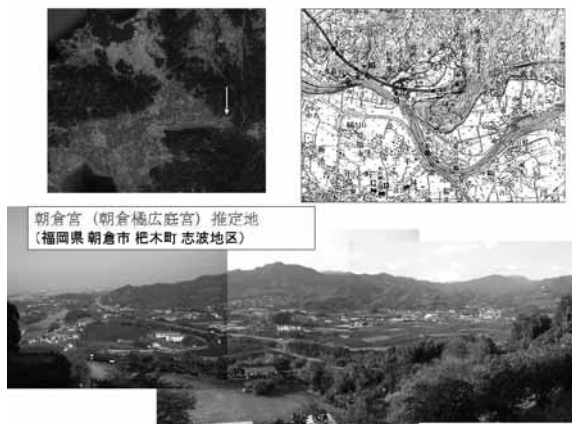


図29 朝倉宮推定地

斉明朝築造説をめぐる議論がもう一つあります。『日本書紀』に六五八年の条に出てくる記事についてですが、六五八年といえますと、まだ白村江の戦いの前です。

一九八八年に福岡の渡辺正気先生が、『日本書紀』のこの記事の中に、朝鮮半島でのことと従来理解されていたある文言について、実はそうではなくて、日本列島のことであると反論なさいました。それに対して山口大学の八木充先生がそうではなく、古代山城はやはり白村江の敗戦後の築城であると論証されました。

ところが昨年、長崎の堀江潔さんが、渡辺説を再評価する説を発表されました。史料をめぐって斉明朝山城造営説が二転三

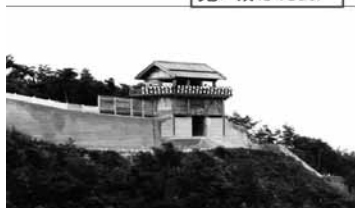


図30 鬼ノ城

天智天皇は、大津宮で突然の病のために崩御します。翌六七二年に壬申の乱が起きます。壬申の乱に勝利を得た大海人皇子の勢力が飛鳥に戻って天武政権の時代になります。この天武朝以後にも古代山城の築造行為は続くと主張する多くの研究者がいます。天武朝、持統朝、文武朝、先ほど鞠智城が最初に『続日本紀』に出てきます六九八年の前後、文武天皇の時代なのですが、そのころまで古代山城の築造が続いているという、

そういう有力な説があるのです。

天武朝といいますと、唐の軍事的な脅威が日本列島にかなり弱くなった時期になります。唐の脅威がないのに、なぜ山城を造るのかということですが、その研究者の方々は、これまでの中大兄皇子政権、天智朝のときの山城は、国家防衛、軍事的な防衛のために造ったのだとし、いっぽう天武朝以降の時代のものはそうではなく、日本列島の地域支配のための拠点なのであり、山城築造の意義が全く変わるのだと主張するのです。私は、そうした理解は正しくないと考えます。

これは岡山県の総社市の鬼ノ城という山城です(図30)。この鬼ノ城の内部での発掘調査で、文武朝前後の、つまり六〇〇年代の終わりの土器のかけらがかなり多く出てい

る。だから、この鬼ノ城の造営がそのところに行われたのだという、そういう説です。

もう一つはこの門に関する説です。この写真は復元された西門（図30左上）ですが、発掘調査で四つの門が確認されています。この門の構造を考古学的に分析しますと、かなり長期間にわたる造営時期が考えられ、従って天武朝からずっと造営は続くのだというようなことが主張されています。これは岡山大学名誉教授の稲田孝司さんの説です。有力な説として受け止められているようなのですが、私は土器の話にしる、門の話にしる、全く間違っていると思います。考古学的に成り立ちえない議論です。このことも本当は時間をかけて説明しなければなりません、時間がありませんので割愛します。

従って、天智朝ではなく、天武朝あるいはそれ以後まで古代山城の築城が続くという考え方は排除しなければならぬと思います。要するに、古代山城は、最初に言いました六六五年から六七〇年、あと六七一年ぐらいまで続いたかもしれませんが、わずか五、六年の間に集中して造営されるというふうに理解しなければならぬと思うのです。

（三）大宰府防衛説の非

古代山城の機能について、明治大学の五十嵐基善さんの論文に的確に要約されていますので、紹介します。

一つには、これは五十嵐さんが全面的に是認する見解ではないのですが、逃げ込み用のお城であるとみる説があります。それから、水城と共に大野城、基肄城については大宰府の防衛が役割であったとされます。大野城は大宰府のすぐそばにあります、水城もすぐ近くにある。従ってこれらの軍事施設が大宰府を守るため



図31 大宰府都城

のものであることが当然なこととして理解されています。私は、全くこれは信用ならない説だと思っているのです。

五十嵐さんの説明では、鞠智城の機能については有明海の防衛、大宰府の支援、隼人支配の拠点などが挙げられていますが、これも本来の鞠智城が造られた目的では全くないというふうに私は考えています。

また、古代山城には軍事的な実用性はなく、交通の拠点に設置されたランドマーク的な施設であった、あるいは少し目立つ政治的な記念物として造られたものであるというふうな理解も、ごくごく最近まで多くの研究者が主張しているところなのです。つまり、古代山城は本来軍事的な、防衛的な施設であると考えられていたのですが、いや、そうではないんだというのが最近の風潮なのです。風潮というと失礼かもしれませんが、大きな流れなのです。私は、いずれも疑わしいと考えています。

まず、大野城です。北方には玄界灘が広がっています。大宰府都城域については、いろいろな議論がありますが、まずはこの辺りだということです(図31)。大野城がすぐそばに

ある。それから、壮大な防塁である水城がある。これがあたかも大宰府を守るように造られている。従って、古代山城は、まず大野城、基肄城と、もう一つ、阿志岐城がこのすぐ南にあるのですが、これらが大宰府を巡って守るように造られているという、そういう理解になるわけです。

六六三年に白村江の戦いに負けます。『日本書紀』によりますと、翌六六四年、水城を造るとあります。同時に防人の制度と烽火（のろし）の制度を作る。六六五年に大野城、基肄城を造る。従って、大野城、基肄城は大宰府を守るために造られたというふうに考えられているのですが、大宰府が造られたとは全く記載されていないのです。

大宰府に関してはこの半世紀の間、精力的に発掘調査が続けられています。その成果として、最初の大宰府政庁Ⅰ期、これが七世紀の後半であるというところまでは突き止められていますのですけれども、果たして六六五年の大野城が造られた段階で大宰府があったかどうか、全く確証がないのです。にも関わらず大宰府があったといわれている。杉原敏之さんという九州歴史資料館の明治大学出身の若き研究者ですが、彼の論文によりますと、時間的位置づけは確定されなかったとされています。

大野城、水城があるから大宰府も同じ時期に造られたんだろうと論証の順番が逆転しているのです。私は大宰府の本格的な造営は、もう少し時代が下ると考えています。つまり、水城、大野城が造られた時期には大宰府は存在していないのです。大宰府がないのに、なぜ大野城が造られるのか、水城が造られるのかという話になるわけです。（図32）

◆ 大宰府防衛説の非

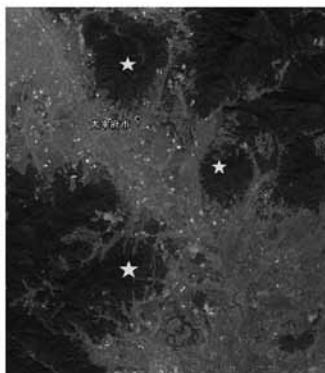


図32 大宰府周辺の古代山城

四、古代山城を正しく理解する

わが国は六六三年の白村江の戦いに負けます。この白村江の敗戦というのは非常に大きいのです。なぜかといいますと、それまで隋や唐は、朝鮮半島、とくに高句麗をくり返し侵略してきましたが、ほとんどの場合、陸路で侵攻していたのです。

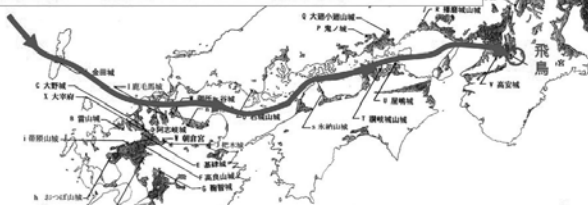
ところが、六六〇年に百済を侵略したときには、山東半島から大艦隊を編成して海路で百済に侵攻してきました。初めてのことです。唐一三万の軍隊が船で黄海を渡るのです。その勢いをもってすれば、対馬海峡を唐の大軍が渡海するなど、は容易なことでしょう。先ほど、ころう君のお話の中に、唐と新羅の連合軍が日本列島を攻めるかもしれないとありましたが、新羅が日本列島を攻撃するいわれは、実はありません。来るとすれば、唐です。唐が日本列島を侵略するのです。それに備えるさまざまな施策を日本列島側としては講じざるを得ない、そういう時期だったのです。

(一) 古代山城防衛網の構築

唐が攻めてくるとすると、どうやって攻めてくるかという点、対馬海峡を渡って、そのあといったん九州北部辺りに上陸するかしないか、それは唐側の判断によります。さらに瀬戸内海を東に進んで、唐の侵略軍の目的は大和、飛鳥なのです。唐の侵略軍の目標は天皇です。飛鳥にいる天皇を拉致するか、殺害するか。

山城群の軍略

- ◆ 唐の軍事侵略という危機 663年～676年(678年)
- ◆ 唐侵略の最終目的地は王都飛鳥にあり



5. 唐はなぜ征服戦争を続けたのか？

- ◆ 中華思想という特定民族至上思想に基づいた華夷秩序を構築するための、諸国服属化を目的とした征服戦争の遂行。
- ◆ 国内統治権威構築・維持・拡大のために不可欠とされた。
- ◆ 周辺諸国は蛮国であり、文明化させるのが中華皇帝の責務。
- ◆ 現実には武力で恫喝し、従わない場合は討伐。

図33 山城群の軍略

それによって日本列島を唐に服属させる、それが目的なのです。ですから、九州に上陸して九州を占領することは、唐の目的ではありません。

従って、唐の大軍は、唐の本来の侵入路はこの図のようなルートなのです（この図では、侵入ルートとして、対馬の中央を横断するように表現していますが、現在南北に分離している対馬本島は、古代にあつては一つであったことを踏まえる必要があります。この点については、講演会当日に参加者のお一人から御教示いただきました。ありがとうございます）。これを仮に百済を攻めたのと同じ一三万の軍隊で攻め込むとします。日本側が手をこまねいて見過ごしてしまいますと、唐の大軍は瀬戸内海をすみやかに東行し、大阪湾に

上陸して、一気に大和を攻めるわけです。これは日本側としては最悪の状況です。それを何とか食い止める
なければいけない。当然、当時の人たちはいろいろな軍略を講じようとしていたでしょう。「孫子の兵法」、「六
韜（りくとう）」などの軍事書がありますが、当時の政治家・軍人にとっては常識以前の素養だったでしょう。
日本列島の防衛の要は、天皇の命を守ることでした。天皇を失えば、日本そのものが滅亡する。服属つまり
他国に隷属することになるのです。人間としての尊厳を奪われ、半永久的に奴隷としての運命を余儀なくさ
れるという、そういう切実な危機感があつたと思うのです。

そうした事態に陥らないためには、容易に瀬戸内海に侵入させてはならないのです。そのためにどうする
かという点、まず九州で唐の軍隊をとどめ置いて、ここで壊滅する、少なくとも唐の軍隊の勢力をかなり削
ぐという軍略を講じるわけです。そのために二二の山城を効率的に配置して、それぞれの役割を持たせて対
応しようとしたのだと思います。

（二）唐の軍事的侵略という危機

その前に問わなければならないことは、唐はなぜ日本列島を侵略しようとしたのかということです。日本
側には、唐に征服されなければならないような落ち度はありません。百済がなぜ唐によって攻め滅ぼされな
ければならなかったのか。百済もまた別に唐に対して特段の反逆をしたわけではないにもかかわらず、一方
的に唐は大軍を派遣して百済を攻めて、国王以下一万二、〇〇〇人を、唐の都、洛陽に強制連行しました。

国王は、翌年、洛陽で死去します。唐は、いったい何のために朝鮮半島、あるいは日本を軍事侵略しようと

したのか。東アジアだけではありません。ベトナムも、チベットも、西域や北方の国々をも、唐は服従させようと、軍事的に侵略するのです。隋も同じです。

これは何ゆえかといいますと、「華夷秩序」が根本にあります。華夷秩序というのは、中華思想に基づく国際秩序のことです。中華皇帝の義務というのは何かといいますと、周辺の野蛮な国々に文明の恩恵を与える。文明の恩恵を受けた野蛮な国々は、感謝の気持ちを表すために、貢ぎ物を中国の皇帝に差し出す。この相互関係の中で中華皇帝は、対外的ではなくて国内の、中国大陆内の統治の権威を確立し、維持し、拡大するのです。逆にその周辺の国々が少しでも背くと、中国の皇帝の権威が揺らぐわけです。中華皇帝の権威が揺らぎますと国内が不安定になって、また、分裂抗争の時代になる。

中国大陆では、二二〇年後漢が滅びて以来、三国時代、五胡十六国時代、魏晉南北朝時代と、内乱の時代が四〇〇年近く続きました。とても悲惨な時代が続いたのです。これを何とか統一して平和な安定した国にしなければいけないというのが、五八九年に南北朝を統一した隋の意図であり、その後を襲った唐の皇帝、唐の朝廷の本当の目的だったと私は思うのです。ちょうど織田信長が天下布武を掲げて、乱れた戦国時代を終わらせて、全国を統一しようとしたのと同じ発想だったと思うのです。当時、この華夷秩序というのは東アジア世界といえますか、アジア世界唯一の国際政治秩序だったのです。いずれにしろ中華思想というのは特定民族優先思想で、周辺の国々を蛮国であると一方的に位置づける。その国々にとっては全く身勝手な厄介なものだったのですが、それが当時の歴史の真実なのです。

◆ 古代山城防衛網の構築
築造時期は併行／機能は2分化

◆ 高安城の軍略

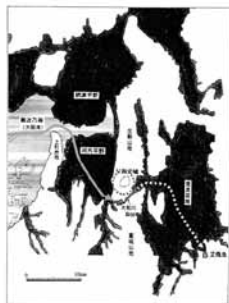


図3 高安城の位置

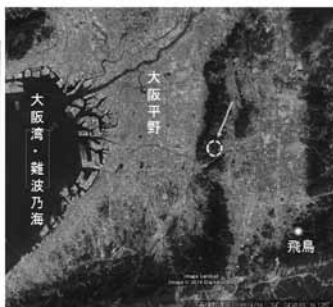


図34 高安城の位置

(三) 高安城の軍略

山城の機能を考える上で、まず高安城を取り上げます。高安城は大阪府と奈良県境の生駒山中にあります(図34)。大阪湾に唐の軍隊が上陸して飛鳥を攻めるには、大和川の峡谷を通るしかありません。この峡谷を通る唐の軍隊を攻撃し、壊滅するための軍事基地なのです。高安城は数ある山城の中で、とりわけ大きく造られています。この大和川峡谷を通過されますと、唐の大軍はあつという間に飛鳥にたどり着いてしまう。

ですから、最大規模の山城をここに設定したと考えていいでしょう。

(四) 筑紫野谷の軍略

それと同じ役割を担ったのが、大宰府を守るための山城とされてきた大野城、阿志岐城、基肄城だと思ふのです。

大宰府がないと考えればどうなるかといいますと、大野城市から筑紫野市にかけての一带は、幅の狭い谷地形になっています。(図35)。これを仮に筑紫野谷と呼びましょう。この谷に唐の大軍をおびき寄せるのです。おびき寄せて、大野城、阿志岐城、基肄城からの軍隊が唐の軍隊を攻めるといふ軍略です。その前面に水城を造ることで、筑紫野谷に大軍がいることを、唐の軍隊に知らしめるわけです、唐は九州の軍隊を無視して、瀬戸内海に行くこともできません。

置き、それらの連携・連動によって唐の侵略を何とか防衛しようとする、そういう軍略であつたと思います。

『日本書紀』にはほとんど書かれておりませんが、当然のことながらそういう軍略を考えなければならなかっただろうと思うのです。

◆筑紫野地峡の軍略

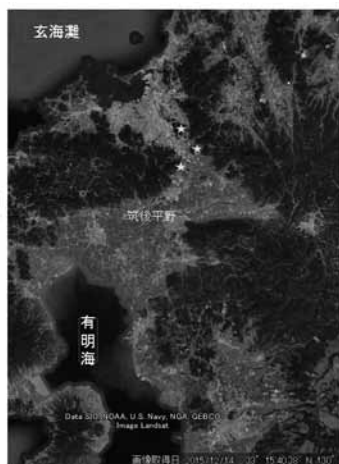


図35 筑紫野地峡

ただ、その場合、瀬戸内海に行った唐の大軍をこの九州に駐屯している軍隊、私は、実態は防人だと思っていますが、背後から唐の軍隊を追撃することになる。唐としては、それは軍事的にまずいいことになります。ですから、唐軍としては、まず九州にいる日本の軍隊を抑えておかなければ、後々の飛鳥進軍がスムーズにいかないということになるのだらうと思うのです。

これを私は筑紫野谷の軍略と呼びます。しかし、それでも唐軍を殲滅することは無理かもしれない。その時のために、筑後平野に防衛軍を配置するのです。当時の防衛軍略は山城だけでは済むものではなかったとみる必要があります。平野部にも多くの軍隊を配置し、あるいは瀬戸内海には水軍を配

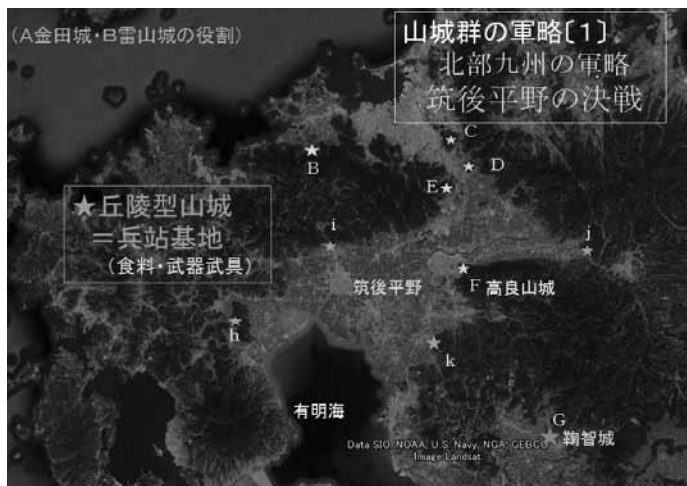


図36 北部九州の軍略

五、山城群の軍略

その筑後平野に唐の大軍をおびき寄せせるわけです。筑紫野谷を出た正面には高良山城という山城があります。高良山からは筑後平野のほぼ全域をみわたすことができます。そこで重要になってくるのは丘陵型の山城（h・i・j・k）です（図36）。私は、丘陵型山城は兵站基地であつたと理解すべきだと思います。攻撃のためにはおおよそ不適切な構造ですが、海を渡って侵略してきた軍隊の一番の弱点は何かというと、兵站なのです。食糧・武器を調達できない。唐が朝鮮半島の百済を攻めたときには新羅という同盟軍がいましたので、兵站の補給が十分に可能だったのですが、日本列島に上陸した時、唐にとつて周りは全部敵なのです。日本側としては、そこが目の付けどころなのです。決定的に有利なのは兵站なの

です。

それを備える場所としてこの丘陵型の山城が造られたと思います。いずれも目立たない隠れたような場所に立地しています。日本側の軍隊が戦闘を続け、食糧あるいは武器が乏しくなったときに兵站基地である丘

陵型の山城に行つて、そこで補給するという、そういう役割であつたと思います。筑後平野での決戦で、なおさらに日本側が負けたとします。その敗残兵たちはどうするか。そこで鞠智城がクローズアップされると思うのです。内部に他の山城にはない広い平坦地がある。ここにいったん落ちのびてくるわけです。ここで退却してきた兵士たちを再編成して、もう一度唐の軍隊を追撃する、そういう体制を整える場所としてこそ、鞠智城の意味があるに違いないと私は思います。

仮に鞠智城が唐の攻撃によつて陥落するとしますと、南九州、中九州の広大な山野がこの兵士たちを守ってくれるでしょう。そのための基地として、鞠智城が造られたのだと私は思うのです。

六 防人の真実

白村江の戦いの翌年の六六四年に、防人の制が始められたと『日本書紀』に書かれています。防人は東国の青年たちを徴兵して、九州で国の守りにつかせたということになっています。東国からだけではなかつたようですが、東国を中心とした地域であつたということは間違いないでしょう。なぜ東国なのか。私は大分県の玖珠という盆地で生まれ育ちました。熊本県境に近く、従つて鞠智城にも近いところが私の故郷です。高校生のころでしたか、防人の話がある社会科の教師から聞かされました。九州の男性はひ弱だからなのだと。それに引きかえ、東国の男たちはたいへん雄々しい。だから、わざわざ東国から兵士を募つたのだ、などという話を聞いたことがあります。いささか落ち込んだ思い出があります。しかし、実はそうではない

のです。

六六〇年あるいは六六三年の朝鮮半島での戦争で、主力となった兵士達、白村江の戦いには二万七千人の兵士が海を渡って行ったのです。その主力はという人たちだったかというところ、西日本の青年たちなのです。他の地域からも援軍として派遣されていますけれども、主力は西日本の青年たちだったのです。その多くが戦死し、あるいは傷つき、あるいは捕虜になって、壊滅状態になっていた。その後には北部九州の守りを固めようとしても、西日本には兵役適齢期の青年たちがいなかったのです。だから東国からわざわざ兵士を、青年たちを派遣させたのだと、かねてから一部の研究者により説かれています。

では、なぜ中央、近畿地方やその周辺地域からではなかったのでしょうか。中央地域は、先ほど言いましたように、最大規模の高安城を造って、そこにも多くの兵士を駐屯させる必要があったでしょう。あるいは、その山城だけでなく、大和の盆地の各所に軍隊の駐屯地を造って、王宮を守るための備えをしていたでしょう。ですから、中央、つまり近畿地方の若者たちは、中央の都を守るために集められるわけです。そうすると、いきおい西国には東国から派遣せざるを得なくなります。これが防人の真実であつただろうと思います。その防人の若者兵士たちは何をしたかというと、対馬や壱岐などの島々や九州北岸の沿岸地域を守っただけではなく、北部九州に展開する、あるいは瀬戸内海地域に造られる山城の築造作業にも主力として従事したと考えるべきだと思います。これも防人の真実だと思います。

が三〇箇所ある。忠清南道だけで、日本全体の二〇倍以上の山城がありました。ですから、百済全体では一、〇〇〇箇所を超えるかもしれない。それぐらい多くの山城があったのです（図37）。

618年	隋、滅亡。 唐、覇権掌握。
628年	唐、天下平定。
630年	飛鳥への遷都。 (歴代遷宮の途絶)。
同年	第1次遣唐使派遣。
645年	乙巳の変(大化改新)。 難波宮遷都。
653年	飛鳥への遷都。
660年	百済、滅亡。
663年	白村江の敗戦
665年～670年	古代山城の築造
667年	大津宮遷都
672年	壬申の乱
676年	唐軍、 朝鮮半島から撤退



図37 百済の滅亡

七. 古代山城無益論

それから、もう一点、これまで見過ごされていた重要なことがあります。古代山城は日本列島で二三箇所確認されています。私は山城築城という国防策は天智政権の全く見当違いの施策であったと思うのです。中大兄皇子政権、天智政権は日本列島をまもるために、百済の亡命軍人たちの知恵を借りながら、全力を傾注して、列島こぞって危機意識を共有して、山城を築造し、防衛制度を整えることにまい進したのだらうと思います。しかし、本当にこれは有効であったのかどうかということを考えなければいけません。

日本の古代山城は、百済の亡命軍人、亡命政治家の知恵や知識を借りて造られたものです。では、その本家本元の百済ではどうであったかといいますと、韓国忠清南道での調査の事例ですが、兵庫県と同じくらいの広さの中に山城

六六〇年、新羅の要請を受けた唐の軍隊が百済に攻め込みます。百済西岸の島に上陸して、それからわずか二〇日経つか、経たないかのうちに、百済の首都、扶余（泗泚城）は陥落します。

唐はこの島に上陸して、一〇日間は体制を整えるために休養をとったとされていますので、侵入開始後、実質一〇日前後で扶余は陥落するのです。二三〇あるいは数百もある山城の役割は何かというと、この都を守るためのものであったはずなのです。しかし、わずか一〇日ももたなかった。要するに山城が一〇〇あるうが、一、〇〇〇あるうが、唐の大軍の前には全く意味をなさなかった、役に立たなかったということになるのです。そのことはすでに知られていたはずなのですが、にもかかわらず、なぜ中大兄皇子政権は日本列島で一生懸命山城を造ろうとしたのかということが問われるべきでしょう。

八、古代山城の否定と超克 ―日本列島古代中央集権国家の構築―

このままではいくら山城を造っても、唐の大軍に攻撃されれば、あつという間に陥落してしまう。天皇のいる都まで到達されてしまい、国が亡ぼされてしまうという、非常に危険な状態だったのです。幸いにもこれに危機意識を抱いた人々がいたというのが、私の考えです。誰かといいます大海人皇子とその勢力です。天智天皇の弟とされている人ですが、これには異説があります。本当に兄弟だったのか疑問があるとする説も根強く主張されています。天智天皇は六七一年に大津宮で崩御します。天智天皇こそ、山城築造政策を主導した人物ですが、六七一年、急な病で死ぬのです。この天智天皇の死についても、かねてより暗殺説があ

るところです。私もその可能性は強いと思います。

つまり、大海人皇子、後の天武天皇の勢力が、この天智天皇の国防のやり方では日本列島は危ないと、そういう強烈な危機意識を抱いたのではなかったかと思うのです。そのために、その山城築造推進派の頭目である天智天皇をまず排除しなければならない。排除した後にも天智政権の勢力は残ります。これを完全にとり除くために起こしたのが、壬申の乱であったと考えています。壬申の乱というのは、天智天皇の息子の大海皇子と弟の大海人皇子が皇位をめぐる争ったものという通説的な理解は不当であり、日本の国防路線をめぐる、必死の路線闘争であったとみるべきだと思うのです。

壬申の乱の結果、大海人皇子勢力が勝利を得ます。それほど危機意識が、日本列島内で広く共有されていたと思います。飛鳥に戻った天武政権は、これまでの山城築造推進政策を中止します。その代わりに何をしたかという、山城だとか、水城だとか、そういう防衛施設を造るのではなくて、日本列島をシステムの上で、制度の上で非常に強固な中央集権国家として作り上げようとなりました。海外勢力の侵入する隙を作らないという、日本列島中央集権国家構築政策に路線転換するのです。

二三箇所の山城のうち、少なくとも一〇箇所の山城は、築造の途中で放棄されています。その放棄の理由が何かという、これもいろいろな議論のあるところですが、私は天武政権が政権を握ったときに、これまで一生懸命造っていたのですが、もう無意味、無益だからやめようということで築造行為を中断した、その表れであると理解すべきだと考えています。そういった中で、鞠智城がその後も使われ続ける、あるいは

は大野城も、あるいは基肄城も使われ続ける。これは例外的な状況です。

最後になりますが、古代山城についての従来の理解には、誤解があまりにも多すぎる。本当の姿というのが、まだ説明されていなかったのではないかと思います。いろいろと反論、異論もありかと思いますが、こういう見方もあるということをござひとも知っていただければ、これ以上に幸いなことはございません。御静聴、大変ありがとうございました。